

受講番号 18070 学校名 一宮中学校 氏名 中岡 良夫

研究の背景

研究対象(学年、クラス等) 1年生 生徒数 35 名
 科目名 1年生 単位数(授業時数) 3 時間 使用教科書名 NEW HORIZON English Course 1

クラスの様子・特徴

本校は高知市の中心部から少し離れた北部に位置する大規模校である。学級(35名)の生徒の多くは本校校区4つの小学校から入学してきている。学校生活は比較的落ち着いており、授業中は概ね真面目に学習に取り組んでいる。

問題の確定

教師やCD等による英語を聞いて繰り返すことは比較的できるのだが、教科書の本文を自力で音読することに困難を感じている。

予備調査

A 授業の観察

全授業2名の英語教員によるチームティーチングを実施している。通常の授業では、前授業の復習、本時の進出単語の理解と発音・進出語句と文法の理解・本文理解と音読を行っている。音読で困難を示す生徒にはT1,T2による個別指導を行っている。

B 生徒による授業評価

読むこと・書くことを得意とする生徒と苦手とする生徒の二極化が進んでいる。読むことを苦手とする生徒は、読む取り組みをする前に「読めない」と言い努力が不十分である。「やれば出来るのだ」という自信を持たせ、英語学習に対する意欲を高めた。

C 学力データ

クラス全体で行う音読や本文理解の応答はほぼ全員ができるのだが、個人での音読や応答に関しては十分な成果を出している生徒は1/3程度である。十分でない生徒は個人指導や答えを導くヒントにより、音読や英語による応答の設定した目標に達している。

リサーチ・クエスチョン

音読の力を十分につけるためにはどうすればよいだろうか。

仮説・実践・検証

仮説1

音読を繰り返せば、自然な英語の読み方が身につくだろう。

実践1

教科書を見ながら英語教員のゆっくりした英語を繰り返すことにより英語音読に慣れさせようと試みた。リピーティング・オーバーラッピング・シャドウイングを行った。教科書の本文にはいくつか生徒には発音の難しい単語や読みづらい文章があるが、それらには特にイントネーションに注意させ、感情を入れながらゆっくりした音読を繰り返させ英文を口慣らせた後、CDの英文の後を繰り返し練習した。

検証1

数回音読練習した英文(30文)の内12文を空白にし、空白のまま音読させたが、ほぼ全員の生徒が空白に正しい英文を加えて音読することができた。次にその英文を書く(テストを行った)が69%の生徒が全問正解、20%が10問以上の正解、11%の生徒が9問以下の正解率であった。音読の効果が書くことに効果があったとする生徒が77%・なかったと答えた生徒が23%であり、効果があったとする生徒の正解率が高かった。

仮説2

多くの英語を聞くことにより、リスニング力を高めると音読力も高まるだろう。

実践2

音読には、多くの英語の音声、英文・情報を視覚や聴覚などから身につけることが有効であることから、CDリピーター・DVDによる音読、英語を多く聞くこと、T1・T2による場面の説明や場面状況を多く英語で聞かせた。そのために教科書の場面設定を英語で示して、英語を聞いてその内容を理解したり、指示を理解できるようにした。できるだけ教室内の雰囲気や英文の場面に即したものとるように教具の準備を十分に行った。

検証2

音読の効果を知るうえでのリスニングテストによる総合的な結果としては、リスニング全問正解率6%・8割以上の正解率83%・6割以上の正解率9%・4割以上の正解率2%という結果が出た。教科書音読の到達目標の結果と生徒のリスニング力は比例している。英文音読における重要な単語のイントネーションの置き方と英文を聞いた場合の聞き取り方の習得がその結果に表れた。場面を想定する音読が良い成果を出している。

仮説3

ひとつひとつの音を大切に音読して、話される英語を集中して聞くことが音読力を高めるだろう。

実践3

ディクテーションを行い、英語を正確に聞き取れているかの確認を行った。英語のイントネーションに慣れるためにALTによる全体・個別指導を繰り返し行った。その後、ALTによる既習の英語表現での質問・応答の試験に対しては事前に各班による教え合いと確認をさせ、個人テストを行った。教科書本文を音読する個人テストを行い、自己の力と今後の取り組みを考えさせた。

検証3

ディクテーション・英語の質問による応答では期待した結果は得られなかった。個人による教科書音読テストにおいてはクラス全体で音読している時点では正しく音読できているのだが個人で読む練習を始めるのと詰まる英文や読めない単語が意外に多いという結果が出た。音読やディクテーション等のテストで良い結果を出す生徒は家庭でも音読の練習をしている。授業中の音読はまだまだ不十分であるという結論から個人指導を増やしている。

研究の成果

英文音読ができることが、聞くこと・書くこと・更には話すこと的能力と大きな係わりが実証された。しっかりした音読が出来ている生徒とそうでない生徒の間では英語習熟度に大きな差がみられる。また、場面に応じた自然な英語や感情を注入しながら音読することが大切である。使うべき場面や相手を意識した音読を繰り返すことにより、英文を暗記に近い形で頭に残し、会話の中で使用でき、聞くこと・書くことにつながっていった。特に、自分で英文を作る作業では、記憶にある文からの応用ができ、それを感情のこもった英語を話すことができた。

今後の授業改善の課題

教科書の本文を読めるという「自信」が英語の力を伸ばそうとする姿勢を自主的に高め、その為の努力を惜しまないことを実感した。その態度が英語の技能の全てを高めることにつながっている。正しく英単語や英文を読める能力を高めるためには、いかに集中力を持って学ぶ気持ちを持って音読するかにかかっている。音読させる気持ちをしっかりと持たせるためにも、「やれば出来る」という実感を体験させたい。